形容詞の語彙的変遷

——中古から中世へ——

寿岳章子

はじめに

語彙をあつかうこと　一般に語彙は、外の世界に大へん近いため、外の世界を明らかにするためにはよく利用されるけれども、言語の内部の問題としては概して放置されているように思われる。意味論のためには、個々の語、乃至は幾つかの語が研究の的になることがある。しかし、語彙体系のための論がごく一般的になされることはあっても、日本語なら日本語としての具体的現実に基いて語彙総体を眺めることはあまり多くないのではなかろうか（たゞ、現代語に関しては国語研究所のすぐれた労作が緒についているし、又特定の文学作品については何々の語彙として論ぜられることもある）。任意にとりあげて個々に論じたり、ある観点からえらびだしたりすることはまだやり易いけれども、総括的に語彙をみることは、音韻や文法の世界に比してはるかに困難である。更に、音韻史や文法史（それらが史を作り得るかどうかはさしおき）は、まとまりやすそうなのでそれに応じて多くの著作も存する。それに対し、語彙が歴史的に云々されるのは、大体として音韻や文法によって規定された区分を甘受してつけたりとなる範囲内に於てであった。しかもごく一部について論じられがちである。それらの区分に結局は語彙史も従わざるを得ないとしても、どういう必然性をもって関与するかを語彙自体から発言すべきであろう。以下の小論は勿論そういう一般論を望みはするものゝ、とうてい達し得なかったあわたゞしい試みにすぎない。

形容詞を語彙変遷の対象として何故えらんだか　形容詞は名詞のような、外的なものに対してそれと表裏関係にたつ密接さはなく、外在の諸現象に対する人間の反応度がかなり濃い品詞と思う。言語、人間、事柄という関係で考える時、形容詞は各品詞中かなり言語的なものとなる。用言だという形式面から文法的性格に加えて、形容詞そのものの意味的な性格がそうなのである。いわば人間表現となるのであって、人間が事柄をどんなに受取ったか、いかに感じたか、などを直接に表出することを使命とする点動詞などより一そう内なる世界に関係するのではあるまいか。例えば形容詞の使用法から男女の性別の一特徴をみようとする心理学者(註1)の試みなどは、そこをうまく利用していると思われる。

名詞の変遷などを扱うときは、どうかすると事柄の世界に圧倒されるか、或いは逆に言語的すぎるような問題に終始するかになりがちである。形容詞はその本質上、認識や物事の把握方式に関係する部分が多いように思われる。勿論、形容動詞や副詞もあわせて考慮すべきであったが、今はさし迫るまゝに形容詞のみの考察を行った。

資料のこと　めやすをつけるために使用する材料は、手近に索引のあるものに頼ったため、中古は源氏物語、並びに築島裕氏の作製になる訓点語語彙索引からすべての形容詞をとり出し（註2）、中世は史記抄、中華若木集抄（註3）の形容詞総語彙カード、及び手当り次第のメモによるもの（めぼしい抄物はかなり多く含まれている）と、バジェスの日仏辞書（註4）とによった。日仏辞書を用いたりしたため、頻度数は全然問題にできなかった。ただ、基礎語彙を作るというような方向でない限り、単にその語のあるなしだけでも一種の見当がつけられるのではなかろうか。不十分とは知りつゝ、一度でも中世語として使われているならという意味で平等にとりあげた。尚、中古の材料と中世の材料とでは位相上かなりの差があるため、同一線上に置て云々できないのではないかとの危惧もおこり得る。例えば、名詞などはどういう世界で話されているかによって登場する語彙も随分違ってくるはずである。しかし形容詞は、先述の本質上、位相差がないとはいえないが致命的なものでもなかろうと思う。後述のように共通語が二時代を通じてかなり出てくることからもそれは推測される。少くとも、他に文献資料がなければ用心しながらなら概論的な方向づけくらいはできるのではないか。又、中世の諸資料はかなり広い言語層を根に持っているとも思われるので、どこかで中古語を受け止め得ているのではなかろうか。

註1　たとえばブーゼマンの研究など。

註2　長期間の中古に対してはもっと資料を集めねばならぬ。時間の余裕さえあれば、せめて諸種の辞書までは利用すべきであった。

註3　寛永十年刊本

註4　勿論日葡辞書を使用する方がより望ましくはあるが、こうした目的の場合、語形などのいぶかしさに対する用心などがあれば、日仏辞書でも十分役立ち得るであろう。

本　論

以下、中古に於て使用されたであろう形容詞と中世におけるそれとを比較してゆく。さしあたってこの論では互いに、いかなる語彙をいかなる原因で否定しあったかを中心に考える。

I・中古にあって中世に見当らぬもの（語形態を中心とし、意味はいちおう無視）。

A・現代語の使用状況から考えて、中世にも当然あったと考えられるもの（即ち、偶然諸資料に見当らぬもの）。

オクユカシ・メメシ・ワカワカシ・ノロシ・イギタナシ・イトハシ・アラアラシ・ヲコガマシ・ヲシゲナシ・カビクサシ・ナヤマシ・ハレバレシ・カガヤカシ・ハダサムシ等。

五十七例（註1）。

B・中古に於ては程度の差こそあれ生きた形容詞であった。それ

が何らかの原因で中世に廃語となった。

a・イ・語構成素の消滅によって。

シヅケシ・ハルケシ・ソゾロケシ・イササケシ・恥ヅケシ等。

ロ・文法素の語形変化によって。

ミマウシ・コトマゼマウシ・サ（ル）ベシ等。

ハ・中世に語形改新の必要あって。

ソソシ（〈ソソカ＝ウシイ）等。

ニ・語幹の消滅によって——中古乃至はそれ以前に於てはその形容詞を構成する中心部はその形容詞のみに孤立的に存在するよりもっと一般的なものであった。とにかく、中世語に於てそれらが存在するよりはるかに安定感を持ち得た。

スズロハシ・カドナシ・イツカシ・ロ疾シ・アザレガマシ・ヨヅカハシ・キヤナシ・ムベムベシ・オボオボシ・シレジレシ・メグシ・ムクムクシ・ミツナシ・イツカシ・ラウタシ・イトドシ等。

ロ・ハ・ニ計百十八、ロ→ハ→ニと進行するに従い、変遷の原因の想定が形態的なものから純意味的なものへとうつってゆく。

b・語としてはa・ニほどの断絶を感じさせず、従ってこれこれの意味だとはその語を使用しないものからも推測しうる（もともと形容詞は場面が与えられてさえあるなら、その語に対する知識がなくとも意味の見当がつきやすいものであるが、これはそれ以前、語を単独に見ただけでも何となく分るもの。a・イ・ロもその傾向があるがこれはそれらよりも更に親近性のありそうなもの）。これらは、ある場合に創作的意図をもって使ってみたとしても容易に人の理解を得られそうである。

キハギハシ・アトハカナシ・カタハラサビシ・ケシキバマシ・ハテナシ・ヒトウトシ・ニクゲナシ・イドマシ・ヒトメカシ・トホドホシ・ワザトメカシ・ナホナホシ等。ナマアラアラシ・ナマカタクナシ・ナマクネクネシ・ナマサカシ・ナマネタシ・ナマハシタナシ等。ココロカシコシ・ココロギタナシ・ココロハヅカシ・ココロヌルシ・ココロネタシ等。モノコノマシ・モノココロボソシ・モノハカナシ・モノナゲカシ・モノシドケナシ・モノゴハシ等。二百五十。

このb項は大半複合語的である（最も広義に、接頭・尾辞もいれて）が、この事実を含めてb項が成立することは、次のような問題を発表させるであろう。即ち、中世に於ても理解し得る以上、形としては存在してもよいはずなのが、何らかの理由でそうならなかった。B・a・ニの諸語をかりに中世まで持続させるのには(1)強力な全語彙体系からの形態的後押しがあったり、或いは(2)その語自体がそれ〴〵に持つ意義、持続的強さの如きもの（いいかえると、形態的には消えるべきだが基本語彙めいたものの中に食いこむだけの意義的必然性めいたもの）を必要とした。それに対してこのb項は(1)に於ては問題はないが（濃度は色々としても）、(2)に於て些か考慮すべき問題を含む。b項語の意義そのものの消滅を来しいかなる意味に於てでも必要としなくなったものから、b項語に附与されている意義は中世語の意義体系にも存する、しかも尚かくかくの語としては表現しない、即ち、選択の結果採用されなかった、ほぼ同一意義でもっと中世人にふさわしい語（それはヲンナシ〉ヲナゴラシイのように同じ形容詞内の移動であったり、或いは又ホケホケシ〉ホウケタのように全然形容詞外へ送

り出してしまうこともある）を生み出しているものに至るまで諸種のものを含む。語そのものに関する選択性は後者に近づくほど強くなり、選択動機はますます探りにくくなろうが、いつかは中世らしさの裏からの証明となるかもしれぬ。そこには偶然や恣意とみえるものの度しがたい障壁があるには違いないが、傾向めいたものは発見できるかもしれない。たとえば、b項中の大群であるナマ・ココロ・モノ等の接頭辞の有するニュアンスの性格は、それが訓点語系の語には現れない源氏物語特有のニュアンス語であるということを十分考慮しても、尚、中古らしさの何ほどかの反映であって、中古の言語構成に参与するものの精神を見得よう。又、オヨビナシ・サマヨシ等の一語的表現は、おそらく中世ではそうした結晶力を持たず分析的表現をとったろうと思われる。理由は色々あろうが、形容詞に一語的に集中させる力の変化もその一つである。

b'・bよりもいっそう中世に流れこんでもよいのにと思わせる一群。この判定は多分に主観的になるおそれがあるが、その意味、語の構成法、語形、いかなる点に於ても中世にあってよさそうなもの。

ニホハシ・**チリガマシ**・ツブラハシ・ユエユエシ・ハエバエシ・ホコラハシ・ホレボレシ・ソシラハシ・ニギハハシ・ヘダテガマシ・アハアハシ・ゲスゲスシ・アツカハシ・ネヂケガマシ・ホノボノシ・キラキラシ・クネクネシ　二十三例。

この種のもの、就中、印のものは、かりにこの語は何時代的かと問う場合、一見の程度では中世と答えてもよさそうである。アツカハシに対してはアツクラウシイというような語が出来ているからだという程度の外部的規制のみあって、これらの語自体には断絶を思わせる何ものもない。ホノボノシ以下は、キラキラトシタ式の表現に委ねられるのが中世の大勢であるから、というような説明によれるものは、いわば形式論めくので事が簡単だが、いくつかについてはとりあえずただ事実を認識するのみである。

以上、中世語が否定した中古語についてのべたが、次は逆に中古語からはみ出た、或いは中世になって新たに必要を生じた形容詞群をながめてみる。便宜上Ⅰの諸記号に中世の現象を対応させてゆく。

Ⅱ・中世にあって中古に見当らぬもの。

A・これは論理的に存在しないのではないか。

B・**a**・**イ**及び**ロ**――語の根幹はかわらないが、語構成形式に於て変化したもの（勿論、連体終止形の一致や、音便形の表面化は論以前のこととしてこゝでは除外する）。従来はク活であり、又中世でもク活形を趨勢として持ちながらシク活を一形として持つようになったもの――これらは後述の新形容詞が少数の複合形容詞を除いてはシク活なのと考えあわすとき、形式的補強の一つとして注目される。又、この二次的シイ型が抄物に多いのも面白い。次の例語中のP印は日仏辞書にあったものである。

アヤウシイ・アタタカシイ・カワイシ（文語的場面）・セバシイ
フルシイ・Pヲサナシイ・Pウタテシイ・シカルベシイ等。

ハ・中古の形を改新したもの。（カタクナシ⋁）カタカ‖ウナシイ（カタクナウシイ）・（アタラシ⋁）アッタラシイ（ニクシ⋁）ニックイ・（マタシ⋁）マッタイ・（フルシ⋁）フルフルシイ・（ニ

ガシ〳〵)ニガニガシイ・(フカシ〳〵)フカブカシイ・(ハヤシ〳〵)ハヤバヤシイ等。十五例。

こうした改新の形式は、長音による語の一部延長、促音挿入、畳語法、或いは又後の記述に関係してゆくが諸種の接尾語であろう。この長音化、特に促音挿入などは、むしろラングよりはパロル的なものとして考えるべきであるかもしれないが、やはり中世一般に他の語についていわれる諸種の現象と相並ぶ固定傾向と思う。畳語法については、これは決して中世独特の現象でなくむしろ古代的なものに積極的にみられる造語法なのもしれないが(形容詞についてみると、共通語を含めて中古六十以上、中世四十足らず)、それよりは以前そういう形式がなかったのに畳語することで新語を生み出した点に注意すべきである。

以上のような形態変化を伴って生じたものは原形とすべて同義かどうか多少うたがわしいかもしれないが、少くとも非常に近い類義語であるとはいえよう。いったいにこの中世での語彙相にみられる一つの特徴は語の乱立である。そして、注意すべきはこのハに該当する諸語が原形を追放せず共存している点である。一般に、ハの外の諸種の原因をも含めて例えば次のような共存関係が具体的に存在している。カタカ=ウナシイ——カタクナシイ——カタクナウシイ・ニクイ——ニックイ——ニクニクシイ・ヒトビトシイ——ヒトラシイ・カドマシイ——カドカドシイ——カドガマシイ・ギヨ=ウラシイ——ギヨ=ウギヨ=ウシイ・ゾクタシイ——ゾクラシイ——ゾクガマシイ・ツベラシイ——ツベツベシイ——フルイーフルシイ——フルフルシイ等。これら諸形の対応の仕方も色々で、意味差があるとしても音声的浮動から二次的に生じているようなものから、語構成形式の改新そのものに何らかの新意義を賦与しているかもしれないものまで色々あることと思われる。

ニ・中世では存在し得て、中古にはどうしても存在し得なかった語。

トケシナイ・チョウチョウシイ・ヲコノケナイ・ツマシイ・ウラウシイ・エズイ・キツイ・シワイ・シツコイ・ススドイ・セセカマシイ・テバテバシイ・トボカシイ・セチベンナイ・ギゴツナイ・クドイ・ヨダルイ・ミスボラシイ・ムサイ・イキダ=ウシイ(イキダワシイ)・イライラシイ・コソバイ・バケバケシイ・ケナリイ・曲モナイ・是非モナイ・等閑モナイ・図ナイ・ハ=ウリヤウモナイ・情ゴワイ・性根ラシイ等。百十例。

こうした語の大群は、多分に現代的な徴候を感じさせるが、このような新しい語群が登場してきた背後にどういう問題を設定すべきなのか。テバメク——テバテバシイ・セセカム——セセカマシイ・ムサ——ムサムサ——ムサト——ムサイのようにまず他品詞との関聯に於て、これらは中世語彙体系に安住しているのであろうが、更にこの事の背後にあってそれらを生むものへの考慮がなされるべきであろう。そうなると形容詞のみに止らぬ全語彙体系のみわたしの上にまず立ってみねばならないが、形容詞側からの個別的発言としては、これこれの形態的支持の上にたって、これこれの意味は形容詞として表現する要があったということからはじめるべきであろう。尚、このニ項は、漢語を語の中心要素とする形容詞が激増しているのは当然のことながら注目すべきであろう。これらの漢語をまたねば表現しがたいある種の新意味が語彙体系に形をとったのである。

b・以下はa・ニほどのみるからな中世語ではなく、語形的にある種の意味は汎時的に推察できるけれども、度合は色々としても)、やがてはⅠ・B・bの逆に、Ⅱ・B・aと並んで中世風を強調することができるもの。

マタウドシイ・アテアテシイ・ミトモナイ・メタタシイ・ミモナイ・名ガマシイ・オクダノモシイ・スヂナイ・ヲサナガマシイ等。百三十例。

Ⅱ・B・a・ニとこのb群とを通じて興味を惹くのは、中世に於て特に顕著な接頭・尾辞群によっての新形容詞の多量誕生である。

コ——型(註3)。コザカシイ・コイタイ・コマルイ・コタノシイ・コゲサイ・コスサマジイ・コサムイ・コアカイ・コスズシイ・コカシコイ・コビクイ・コガルイ・コサビシイ等。

テ——型。テヅヨイ・テヨワイ・テヌルイ・テムサイ・テマタイ・テゴワイ・テガタイ・テガルイ・テガマシイ・テドヲイ・テヂカイ・テコイ・テセバイ・テビロイ・テバヤイ・テバシカイ等。

——クサイ型。仏クサイ・法クサイ・シワラクサイ・カナクサイ・教意クサイ・仙人クサイ・ヒネクサイ・フスボリクサイ・アカガネクサイ・モノクサイ等。

——ラシイ型。アハ=ウラシイ・ムサラシイ・愛ラシイ・愛相ラシイ・正直ラシイ・性根ラシイ・出家ラシイ・ジント=ウラシイ・ジッシラシイ・俗ラシイ・セカラシイ・ナサケラシイ・シヲラシイ・ハカラシイ・ヲトコラシイ・サツベラシイ・ヲナゴラシイ・ハヂラシイ・ヒトラシイ・マコトラシイ等。

——ナイ型。勿体モナイ・ナマヅケナイ・セワシナイ・セチベンナイ・ギゴツナイ・セマジナイ・アラケナイ・ムゲツケナイ等。

——ワシイ型。ウヤマワシイ・イソガワシイ・イマワシイ・ハヂガワシイ・ハヅラワシイ・ハヅカワシイ・イヤワシイ等。

——クラウシイ型。アツクラウシイ・ヘタクラウシイ等。

その他、**ウス・ウソ・ヲソ**等の諸接頭辞がある。これらの現象と、中古に於て盛に使用されたナマ——、モノ——がこの時期にどれだけ残りどれだけが更に延長されたかとをあわせみるとき興味がある。例えばモノについては、中古のモノ——が殆どなくなったあげくにモノスゴイ・モノガマシイ・モノヨイ・モノクサイモノワルイ・モノクドイがはみ出、ナマについては、ナマヌルイ・ナマナマシイがはみ出、同様に中古に盛であったナマ——は大半を否定されているのである。中世に於てモノ・ナマがあるのはおそらく中古人がモノ——・ナマ——を愛好した方向へではない。モノ・ナマもそうした意味では中世化しているといえよう。

b'・その話のあり方がやや非個性的でbより更に汎時的であり、中古に対してかなり非異質的に思われるもの。この中には、中古にフトルがあってフトシがないのはおかしいから、今の場合、限られた文献でみつからないだけで、実際にはあっただろうという類の推測をさせるようなものから、あってもよかったのに真実やはりなかったというようなものまで色々と思われる。Ⅰ・B・b'において手を束ねたように、ここでも中古語の語彙体系自体の問題として疑問を後に残さざるを得ない。

サシモナイ・マメシイ・ココチアシイ・富マシイ・ニギニギシ

イ・ヒトシゲイ・モノノケガマシイ・ノゾマシイ・ココロウレシイ・イサマシイ・ヨソガマシイ等。四十例。

以上、主として外側からの観察だけで問題を拾いあげてきたが今核心として考えねばならぬのは、やはり形容詞語彙の一貫した流れである。こゝに状態を明らかにさせるため、中古・中世どちらにも採集できる語を抽出した。

ア アザラケシ・アキラケシ・アサシ・アサマシ・アシ・アダアダシ・アタラシ(可惜)・アタラシ(新)・アヂキナシ・アツシ・アハシ・アブナシ・アヘナシ・アマネシ・アヤシ・アヤフシ・アラシ・アリガタシ・アワタダシ・アヲシ・アカシ・アマシ

イ イカシ・イカメシ・イソガシ・イタシ・イタハシ・イツクシ・イツトナシ・イトキ(ケ)ナシ・イトホシ(中世イトヲシイ・イトウシイ両形)・イフカヒナシ・イブセシ・イマイマシ・イマダシ・イマメカシ・イミジ・イヤシ・イロナシ・イチジルシ・イタヅガハシ・イタマシ・イサギヨシ・イブカシ

ウ ウシ・ウシロメタシ・ウシロメタナシ・ウスシ・ウタガハシ・ウタテシ・ウツクシ・ウトウトシ・ウトシ・ウトマシ・ウヒウヒシ・ウラメシ・ウラヤマシ・ウルサシ・ウルハシ・ウレシ・ウレハシ・ウヤウヤシ・ウヅタカシ・ウマシ

オ オクフカシ・オソシ・オソロシ・オダシ・オトナシ・オナジ・オホケナシ・オホシ・オボツカナシ・オモオモシ・オモシ・オモシロシ

カ カウバシ・カギリナシ・カクレナシ・カシガマシ・カシコシ・カタクナシ・カタシ・カタジケナシ・カドカドシ・カナシ・カヒガヒシ・カヒナシ・カラシ・カルガルシ・カルシ・カロガロシ・カロシ・カダマシ・カマビスシ・カユシ・カンバシ

キ キタナシ・キヨシ・キビシ

ク クサシ・クチヲシ・クハシ・クヤシ・クラシ・クルシ・クロシ

ケ ケダカシ・ケハシ・ケブタシ(中世ケムタイ)・ケヤケシ・ケガラハシ

コ ココロウシ・ココログルシ・ココロニクシ・ココロブカシ・ココロボソシ・ココロモトナシ・ココロヤスシ・ココロヨシ・コシ・コトガマシ・コトゴトシ・コトナシ・コノマシ・コハシ・コヒシ

サ サカシ・サトシ・サビシ・サムシ・サヤケシ・サリゲナシ・サワガシ

シ シゲシ・シタシ・シドケナシ・シルシ・シロシ・シハユシ・シブシ

ス スクナシ・スゲナシ・スゴシ・スサマシ・スズシ・スシ・スボシ

セ セバシ・セムカタナシ・セハセハシ・セマシ

ソ ソヽカシ

タ タカシ・タドタドシ・タノミナシ・タノモシ・タフトシ(中世ではタットシが殆ど)・タメシナシ・タヤスシ・タクマシ・タケシ・タダシ・タノシ

チ チカシ・チヒサシ

ツ ツキナシ・ツタナシ・ツツガナシ・ツツマシ・ツヨシ・ツラシ・ツレナシ

ト トコロセシ・トシ・トドコホリナシ・トホシ・トホドホシ・トボシ

ナ ナマシ・ナマグサシ・ナガシ・ナガナガシ・ナゲカシ・ナサケナシ・ナシ・ナツカシ・ナマメカシ・ナンナシ・ナレナレシ・ナラビナシ

ニ ニクシ・ニツカハシ・ニガシ

ヌ ヌルシ

ネ ネガハシ・ネタシ・ネブタシ（中世ネムタイ）・ネタマシ

ハ ハカナシ・ハカバカシ・ハゲシ・ハシタナシ・ハヂガマシ、ハヅカシ・ハヤシ・ハナハダシ

ヒ ヒサシ・ヒトゲナシ　ヒトシ・ヒトビトシ・　ヒロシ・ヒキシ・ヒクシ・ヒラシ

フ フカシ・フルシ

ホ ホイナシ・ホソシ・ホドナシ・ホノグラシ・ホシ

マ マギラハシ・マニトシ・マサナシ・マダシ・マヂカシ・マヅシ・マバユシ・マサシ・マドシ・（マロシは中世マルイ）（註4）

ミ ミグルシ・ミジカシ・ミダレガハシ・ミヂカシ・ミニクシ　ミミカシガマシ・ミミチカシ

ム ムツカシ・ムツマシ・ムナシ・ムマシ

メ メヂマシ・メヅラシ・メデタシ・メンボクナシ

モ モドカシ・モノウシ・モノオソロシ・モノガナシ・モノクルハシ・モノサビシ・モノスサマシ・モノフカシ・モノモノシ・モロシ

ヤ ヤゴトナシ・ヤサシ・ヤスシ・ヤマシ

ユ ユカシ・ユユシ・ユルシ

ヨ ヨシ・ヨシナシ・ヨブカシ・ヨロシ・ヨワシ・ヨロコバシ

ワ ワカシ・ワヅラハシ・ワビシ・ワリナシ・ワルシ・ワロシ

ヲ ヲカシ・ヲサナシ・ヲサヲサシ・ヲシ

これらはいわゆる基礎語彙の幾分乃至は大部分となるかもしれないが、基礎語彙そのものでなく、単に共通語彙であるにすぎないしかもこの語彙群は、例えば顕著な例として○印をうったもののように、語形は同じでもかなり意味を異にしてくることも多い（形容詞はその本質上もっとも場面に影響されやすかったり、過度の解釈力がつよく働いたりすることがよくある）ので、「共通」という意味が語形的にしか通じなかったり、或いはウヒウヒシやタットシのように、意義そのものが時代を通じて比較的安定しているものなどさまざまで些か不純である。或いは又、×印のように中世では専ら副詞的用法乃至は連体用法しか持たぬもの、更に日仏辞書で形容詞として語をあげたあとに副詞形と名詞形を並挙したものとそうでないものとの差なども考慮すべきであろう。とにかくもう少し整理を要する。そして少くとも安定度の高いものから浮動をきわめるものへ――（この場合、意味変遷といわれるものについての種々の分析方法――限定・拡張などの概念をあてるのもよし、ある程度一つにくくってしまい、かなり根本的な意味素を設定して、あとは場面的な展開史のようなものを作るのもよし）の序列をつけておくことが必要であろう。次に、個々の語

彙史にも十分立った上で、一まずは共通語として設定される語群を、その意味に従って一定数の群に分ち、その上で共通に時間に耐えてきたところに、意義と形式との自己主張をみとめるとしたら、それらを基礎としてそれぞれの時代に特有な語はどんな理由で存在価値を有し、いかに時代に忠実であるかを理解しうるかもしれない。この分類については、今私は何をなすこともできないが、かりに国語研究所の用語研究による分類や、バイイによる分類があることをたゞ知っている程度で、極めて大ざっぱにこの場だけの見当づけのため、感覚・価値・量・時間・空間・存在・人格・心情表現・主情的対象観察・緊張・関係等の十一項目にわけてその大体の数のふりわけをみた。その結果、もっとも形容詞的であるかもしれない心情表現や価値・感覚等に語が集中していたのは当然であり、故に共通語たり得るのである。こうした面からみると、中古や中世で互いにはみ出しているのはおそらく、これらの周辺部に於てであることが見通しとしていえる。たとえば独特の接辞のもつ描写力の違いなども、それらが感覚その他についても、意義質をかえるというよりはむしろニュアンス創造の面に於てであろう。そして又、そういうニュアンスを志向する裏面に初めてことばをつくる人の心を考えてみたくなるのである。

尚、各々はみ出た語はいわば共通語に参与せぬ語であるが、それは基礎語的なものでないとしても、当然それ〴〵固有であり個性豊かなものも多いのである。今かりに、もし中世語の理解が現代人に些かでも親近性をもってなし得られるならば、古代否定から近代的なものへの何かをみとってよいのかもしれない。そういう眼で中世をみる時、少くとも形容詞に関する限りではかなり現代との共通性があるように思われる。新しい形式の与え方は或いは中古のような美的効果に乏しくみえるかもしれないが、たくましい描写力に富むかの如くである。次に、数だけで扱ってみると共通語二八八、中古特有語四百四十五、中世三百二十三となる。この点からいうと、中世では形容詞は貧弱になったということになり、柳田国男氏のいわれることなどが思いおこされるけれども、次に考えるべきことは、中古に存在した様々の形容詞がどれだけ残る必然性があったかということである。それはことば全体から意義的にみての位置づけから語られねばなるまい。よしそれが残り得る意義であっても、それを受けている中世のことばの活動力が全般にわたって論ぜられねばならぬ。さしずめ、形容詞にすぐ侵入してくる漢語系の形容動詞風の語彙や、擬態・擬声語系による一連の副用語の働きも考慮に入れるべきであろう。それら一切の基礎の上にたち、語が何の必要のためにいかに生じたかを、すべてを含む全般的人間の生活に基いて広く眺める時、はじめて語彙史の曙光がみえるのではなかろうか。

註1　以下にあげてゆく数字も同じことだが、五十七などという数字は数値そのものに何の絶対性もない。ただ比率的な何ものかを示す程度にすぎない。

註2　中世のソソカウ＝シイの形は、むしろ中古に別にあるソソカシから出ているとみるべきだが、ソソシが何故なくなったかという点からみてこの項をいちおうたてた。尚、長音表記に＝を使用するのはキリシタン関係のもの即ち日仏辞書所載のものにかぎった、以下同じ

註3　「こ」に関してはその意味や語彙の考察を既に行った。

註4　マロシ・マルシは母音差を重要視すれば共通語にならぬかもしれないが、ひとまずこゝにおさめる。

おわりに

以上のあわたゞしい論は、中古から中世への形容詞変遷について、どう何がかわったかを具体的につきもせず、又色々のものゝ変遷中形容詞のそれがいかに独自かを結論づけてもいない。発表会に話憂を他とのバランス上とりあげたかったため、資料的な周到の準備にも、本質的洞察にも欠けて、極めて安易貧弱なものとなってしまった。一般に話憂史といわれるものを作るための出発点の一つにせめてなったらとねがうばかりである。（一九五五・六・十七）

〔附記〕国語研究所の方々のお仕事、及び築島裕氏・大塚光信氏には直接間接に大へんお世話になった。あつく御礼を申上げる。

―西京大学助教授―